【書　評】

武岡 暢『生き延びる都市―新宿歌舞伎町の社会学―』2017，新曜社.

評者　関 駿平

新宿歌舞伎町は現在においても日本を代表する繁華街であり、眠らない街として知られている。数々の浄化や一斉摘発が実施されながら何故、歌舞伎町が歓楽街として存在し続けるのか。この点が本書の主題である。本書は、2000～2010 年前後の新宿歌舞伎町が維持され、再生産されるメカニズムについての研究である。

新宿歌舞伎町という流動性が高く様々な顔を合わせ持つ盛り場のメカニズムを様々な角度から分析することは容易ではない。歌舞伎町は著者自身が指摘するように、商店街組合の縮小や、風適法の施行による新宿区との関連の断絶、雑居ビルが密集し入居者の出入が激しいため発生する不透明な状態（「整序されずに流動する細分性の集積」）により、その内実を見ることが非常に困難である。

著者は多様な歌舞伎町における人々の活動を、フィールドワークやインタビュー、資料を用いて、記述している。著者は歌舞伎町における活動の場について、大きくは 3 点に着目し、1)自治体やビルオーナー、不動産業者が活動する雑居ビル、2)風俗産業が活動する店舗、3)民間パトロールや客引き、スカウトが活動するストリートに分けた上で、時には歌舞伎町をパトロールし、時にはキャバクラで男性スタッフとして勤務するといった多様なアプローチからそれぞれに接近している。

本書は博士論文に加筆修正を加える形で刊行され、歌舞伎町研究の問題設定や歴史を辿った 1,2 章、上記にあげた活動の場にそれぞれアプローチした 3～5 章、歌舞伎町の維持と再生産のメカニズムを論じた 6 章（結論）によって成り立っている。

本書の論考を支えているのが、地域社会に関する先行研究の精密な再検討である。著者は第 1 章にて学説史を辿りながら地域を主体が活動する場として捉え直し、そこで生活する人々と出入りする人々とその活動に焦点を当てるという戦略をとる。歌舞伎町と聞いて地域というキーワードは想像し難いが、本書における地域は「地域コミュニティ」を含意するものではなく、物理的な空間を指す。

この視座には、これまでの地域社会に関する社会学研究の多くが空間、居住、コミュニティが重なった狭い領域に焦点を当ててきた中（その他の領域に焦点を当てた研究についても言及している）、空間を住民、コミュニティから切り離し、あくまで場に着目することでその流動性を捉えることが目的にある。

本書はその視座を活用し、歌舞伎町における諸活動相互の関連性に関して「媒介=分離」という概念を導き出す。「媒介=分離」とは、ある 2 者の間に第 3 者が媒介者として仲立ちをすることで、2 者の分離関係が安定化するという定式を指している。特に歌舞伎町では、上記に挙げた「整序されずに流動する細分性の集積」による不透明性によって、内実が分からない現状に仲立ちが挟まることで両者のアクセスを可能にし、アクセスを調整している（時には断絶する）という。著者はフィールドワークから、素人のビルオーナーに代わってローカルな知識に基づいて歌舞伎町独自のテナントとやり取りする不動産業者、店舗とキャスト（風俗産業の労働従事者）の間に立って 2 者の利害の調整を行うスカウトの存在などを挙げ、

「媒介=分離」をする存在が歌舞伎町の不透明性を背景に成立していること、そして不透明性を安定化させることで諸活動が歌舞伎町の再生産に影響を与えていると述べる。

特に本書で描き出された歌舞伎町の「ストリート」という活動領域は興味深い。ストリートは、単に人々が目的地に向かうまでに使用するインフラではない。ストリートは絶えず開放性を持って外部の人々を受け入れ、対照的に閉鎖的な歌舞伎町の内部へと誘う。来訪者の様々な需要に従って、その仲介を果たすのがスカウトや客引きであり、ストリートは歌舞伎町の再生産のメカニズムにおいて重要な役割を果たす「仲介の領域」である。ストリートとは言っても歌舞伎町の中でも、通りによって特徴が異なり、フィールドによって異なる記述や分析があるが、人々の流入が前提に成立する盛り場の研究において重要な活動領域であることは間違いない。本書ではストリートの性質のみに着目するのではなく、あくまで再生産というメカニズムの構成要素としてストリートを位置づけることで、歌舞伎町という街でしか存在し得ない独自のストリートが描き出されていた。

そもそも、経験的に調査がされておらず、複雑な歌舞伎町を多角的に記述した本書の意義は言うまでもない。2017 年 11 月、雑誌「現代思想」にエスノグラフィー特集が組まれるなど、人文科学における質的調査への関心の高まりの中で、エスノグラフィックな記述から一定の距離を取りながら（これはインタビュー内容等を公表しないことが要求されることが少なくないことに一部起因する）、参与観察やインタビューといった手法のみならず、先行研究の精密な再検討による視座の設定、新聞や統計資料の活用などから内実に接近する本著は今後の質的調査の 1 つのモデルとなりうる。

しかしながら著者も指摘しているように、歌舞伎町において活動を行うアクターについては多様な記述があるものの、歌舞伎町に来訪する人々の属性や活動の記述が少ないことは本稿でも強調しておきたい。それらの人々が多様であることは論じるまでもないが、主要なアクターに関しては一定数の類型を持ってこれを論じることで、本書で注目されたストリートというフィールドを更に細密に記述することが可能だろう。特に新宿は、郊外鉄道のターミナルとして発展した盛り場として位置付けることが出来る(牛垣 2008)。その中で鉄道を使い新宿を利用する通勤者に注目すると、通勤ラッシュ・終電といった一日の「リズム」の中に歌舞伎町への理解をさらに深める鍵がある。さらに、風俗産業とは切り離せない関係にある外国人労働者や、増加の一途を辿る外国人観光客の存在も見逃すことは出来ないだろう。

歌舞伎町は新たな転換期にある。2017 年現在、新宿駅では、2020 年東京オリンピックに合わせて「新宿駅東西自由通路」の着工工事の検討が進められている（2017 新宿区公式ホームページ）。東西が分断されていた新宿駅に東西を繋ぐ通路が出来ることは、歌舞伎町と無関係ではない。2015 年には、新宿コマ劇場跡地にホテルや映画館の複合施設が建設されたことも加えて考察すると、歌舞伎町に流入する人々がさらに多様化することが考えられる。これらを踏まえると、上記の存在は無視することは出来ず、彼らが「媒介=分離」の作用にどのような影響を与えるのか、更なる考察が必要である。今も変化を続ける歌舞伎町を見た本研究は、今後も継続して行うことで更なる学術的意義を持つ。

参考文献

牛垣, 2008,「地理学を中心とした盛り場研究の現状」『地理誌叢』50-1: 53-59.新宿区, 2017, 新宿区公式ホームページ (2017 年 10 月 2 日閲覧 http://www.city.shinjuku.lg.jp/soshiki/toshikei01_002133.html).